

東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第8回 近藤能之さん（後編）

さまざまな活動の形

自然とのこどもたちの触れ合いは、震災によってだいぶ失われてきたことが多いので、自然と触れ合える機会を多く作りたいなということもあり、NPOの活動として自然と触れ合う外あそびを今も続けています。今週も川遊びのイベントを予定しています。あと、今私が個人でやっている事業として、「小高やどりぎ。」というところを冒険あそび場登録して、プレーパークとして使っています。ここの場所は、とにかくつながる場所を作るのにいいかなと思って。馬を見に来る人もけっこういるんですよ。特に7~9月の3か月は相馬野馬追というお祭りがあるので、けっこうたくさんの方が見に来ます。私が早起きして観覧するのにすごくいい場所を取るの、そこでみんなで見るんです。朝は大将のいるところに行って、出陣式みたいながあるので、それも見に行きます。前の日の夜はここでBBQしたり宴会したり。そういうのきっかけに、みんな集まりたいだけなんですけどね。で、お互いが友達になって、いいんじゃないですかね、そういう感じで。私はつなげるだけなんです。それから、こども食堂もやっていて、企業の協賛を受けたものを届けたりしていますね。それは社協とかほかの社会福祉法人との連携事業でやってます。あとは、ウクレレのチームを作って、音楽でみんなの心を癒していこうっていう活動をしています。ウクレレは、熊本からいきなりある日突然、みなさんでお使いくださいって10台送られてきて。なので、ウクレレあげるからウクレレやってみたい人は集まって~みたいな感じでやったのがきっかけです。その後、ウクレレ教える人が現れたりして続いていますね。せっかくだったら地域のいろんな人達を盛り上げるのに我々もやろうっていうことで、イベントをやったり出たり、みんなで活動しています。お母さん方が多いですけど、こどももいます。他には、絵本ライブといって、唄や楽器も使って絵本と音楽を融合させたライブ感あふれるものを月1回定期的に開いています。絵本ライブは、メンバーの中に図書館の司書の方がひとりいて、絵本の読み聞かせ活動をやっていたんですけど、読み聞かせをずーっとやっているのって、聞く方もなかなか退屈してきたりするのもあって、ウクレレとかほかの楽器と一緒に演奏したり唄ったりライブ形式でやったらどうだろうね、なんて話から始まったんです。だから全然無理がないんですよ。すこしずつ、いろんなきっかけがありますね。今度、秋には秋まつりがあるので、ウクレレのストリートライブをやります。こどもたちとか家族で来てもらえたらと思っ

ています。

保育園は保育園で、それ以外の活動は別の活動として、いろんな立ち位置でやっている、というのが現状ですね。いろんなサービスをいろんな角度から提供できるので。うちの保育園のこどもたちだけのものもある、ほかの市内のこどもたちが参加できるものもある、ひとり親世帯もある。対象は基本的に家族です。特に冒険あそび場はちょっと山のほうにあるので、街からこどもたちがふらっとやってこれるような場所ではないんですね。だから家族で来て、家族に対して、冒険あそびとか自然と触れ合うあそびをレクチャーしたり、サポートしたりっていうことになりますね。



こどもの変化について

こどもたちの変化は、もちろんありましたね。外あそびできない時期が続いて、その反動じゃないけども、しゃべらなかつた子がしゃべるようになったとか。なにしろ制限していたのは大人の都合じゃないですか。こどもはやっぱり、外であそびたい。あれしちゃだめだ、これしちゃだめだって制限されるよりはのびのびあそびたい。だから、じゃぶじゃぶ池ができた時もそうですけど、変化っていうのは本当に大きくて。ここでちょっと例を挙げきれないほどあるけれども。私が怖くなったのは、うちの子、ゲームがすごいまくなったんですよ、って親が話すことかな。こどもがうまくなったことに対して、危機感持つ親だけじゃなかった。一緒にやっていた親もいますけど。ゲームは別に人と話さなくても済むわけですよ。でも外で友達とあそぶっていうのは、友達と話をしたり、体を動かして言葉も出す。そういうことがすごく大事なことだなって思いましたよ。こどもの様子が全然違うんだもん。でもうちの冒険あそび場に来ると、お父さんとか大人の方が夢中になってあそんでいたりしてるけどね。考えてみれば大人だっていろいろ我慢していて、外で活動している人が少なくなってるんじゃないのかなと思いますね。だから今ここに来る人は親もひっくるめて面倒見ているような感じ。だから家族で来てもらう形でやっています。こどもだけじゃないんですよ。こどもを取り巻く親も一緒に関わって、自然と触れ合って、こういう風にやろうねってところ。大人も巻き込んでやれると家族の安心感が作れていいのかなと思うよね。こどもだけの安心感ではちょっと弱いかなって思います。

放射線に対して

放射線に対する不安を抱えている人は、多くはないですね。多くはないけど、いないわけでもないですね。例えば食べるものに気を遣っている人は多いですし、これから何か癌みたいなのが出るんじゃないかっていう心配を持っている人もアンケートを取るとだいたい1

割くらいは、変わらずいますね。たぶんその人っていうのはこれからもずっと不安なんだと思う。でもそれって、無理に溶かそうとしなくていいのかなって思っていますけどね。もう10年経って、徐々に徐々に溶けてくればいいかなと思っていますので。

保育園の給食の食材はまだ、県外産のものにしていますね。生鮮食料品については、今でも放射線のベクレル検査をやっています。でも県外の作物からも100ベクレル超えるものもたまに出たりするので、県内県外っていう線引きもあまり関係ないような気がしますね。ただ安心するから、やっていますね。安全かどうかっていうのは、医学的なことも含めてわからないこともあるので。だからまず安心感をどう作るかっていうところ。外あそびをするっていうのも、安心感を作る上でのひとつなんです。大きな要素です。外でのびのびあそべるね、自然と触れ合えるって、もう、安心だよっていう裏付けになるんですね。だからそういう人たちが増えれば増えるほど、安心感の大きさっていうのは広がってくると思っています。屋外で冒険あそびとかの活動をやろうよっていうのは、じゃぶじゃぶ池で止まっていたらだめだよっていうのがあって。あくまでも人工池だから。公園だから。そこから一歩飛び出して自然と触れ合ったり、もっとワイルドなあそび、いろんな危険に対峙した時にそれを乗り越える力をつけたり、というようなところを作らなきゃいけないってところは、保育園から一歩出た私の個人的な活動やNPOの活動として、やっています。

家族と安心感創り

私の活動の対象は、南相馬全体の家族だと思っています。自分の園だけよければいいみたいな感じはイヤなんです。ほかの保育園の子と友達になったり、親同士も知り合いになったりしたら、いいじゃない。発達障害のこどもがいたら、公園にも行きづらくなって子もいるから。だからこっちに来て、一緒にあそんだら、とか、そういうこともできるし。なんかね、今の社会ってひとつのものの中に当てはめようとする、必ずこぼれてくるこどもとか家族とかいてね。だからこそ、広く、あれこれできるようなフィールドを作ることのほうが、私はこれからはますます合ってくるんじゃないのかなって思っていますね。もう基本的に自由人なので、あまり窮屈なところでやりたくなくていうのがあって。

それから、南相馬で暮らす、安心感を創ることです。失われた安心感を、子育ての安心感を創り出すこと。それが、私のテーマですね。その中の重要なコンテンツに、外あそびっていうのがあって、それ以外にもいろいろあると思うんですよ。それだけじゃないから。でもあそびの中で、自然と触れ合うっていうコンテンツは、公園でのあそびとまた違うから。両方必要なわけで。あそびの幅を広げることっていうのは、生き方の幅を広げることだと思います。だから私の一貫してやっているっていうことはぶれていなくて。安心感創りですね。

安心感が変わっていく

震災後の不安っていうのは、放射線に対してっていうのが強かったですよね。安心感を創るっていうのは、暮らしていく中で不安だっていうものをすこしずつ取り除いたり解消し

ていたりすることで。でも、放射線に対して気にしなくなっている人が増えてきているわけですから、今はね。だからいつまでもそれにスポットを当ててもしょうがないから。じゃあ今、南相馬で子育てする安心感ってどういうところだろうってなったら、さっき言ったように、外であそぶとか自然と触れ合うことってというのは、まだまだ解消されていないので、そこをなんとかしてあげたい。特に、ひとり親とか不登校の問題も南相馬でも増えてきているので、そういうところもあわせてね。だから、ポニーや山羊もいますが、動物のお世話しながら心を癒すというか、そんなようなこともやっているし。まあ幅を広げようと思えばいろんなところから広げられるんですけど。私、体1個しかないの、なかなかそれ以上っていうのはできない感じですね。



安心感って、気にしないでいることなんです。わざわざ、いま自分ここにいる安心だわ〜って思っていないでしょ？それが当たり前だっているのが、安心感がある状態で。震災後はそれがなかったわけですよ。ここにいていいのか、暮らしていいのか、どうなんだこうなんだっていうのがあって。じゃあ、放射線に対しての不安を解消、取り除くための活動、そこから、より子育てしやすい環境づくりに、流れが変わっていていると思いますよ。

人間の不安って、見えないものだけにいろいろあるんですよ。ほかの人から見ればそんなことと思うようなことも、当人にとってみれば、実はこんなところが不安なんです、みたいなのがあって、非常に曖昧なわけ。曖昧なものだから、なんとなく不安だっているわけですよ。だからすこしでも楽しいことが増えたり、今までやってなかったことが体験できたり、背中を押してもらったりってところで、ちょっと元気が出てきた、とか、ちょっと不安な部分が安心しました、となる。だから安心って、広い意味で使えますよね。それを積み上げていくことで、ここで暮らすのっていいよねっていうことになるんじゃないですか。必ずしも便利さとか、豊かさっていうところにとらわれなくていいのかなって思いますよ。不便なところも楽しんでいければいいですね。だから目に見えない相手、コロナもそうだけど、見えないから不安だっているのはありますよね。私は正直言うと、震災後の放射線のことよりも今のコロナのほうが厄介だと思っています。出口の光が見えないような感じがして、疲れています。コロナは測れないし、除染できないから。保育園は、幼稚園と違ってコロナであっても開かなきゃいけない。保育園開かないと働けないから困ります、みたいなね。うちの職員の命も守らなきゃいけないし。それでも職員を鼓舞させているけれども、難しいですね。親の仕事の都合かと思うと、なんだかなって思うよね。その割に社会のシステムがちゃんとしていなかったりとかするでしょ。なので安心感を創ることは、コロナじゃちょっと難しい。放射線ではできたけどコロナはちょっと、民力でなんとかしにくいなって。厄介だと思っています。

居場所と家族

私は、そういういろんな試練を今回与えられたことは、自分の人生が豊かになったとは思いますが、そういう人たちがばかりじゃないのもわかる。でも、試されているわけですね。だからよくお父さんに言っていたのは、試されてるよって。今、父としてあるべき姿が試されているって。いまがんばらないで、いつやるんだよって、発破かけてましたけど。まあそれがいいのか悪かったのかはわからないけれど…とにかく、発破かけてましたね。当時いろいろ一緒にやっていた父さんとはいまだに戦友みたいなもんだし、ボランティアの人もチームでやってたから、単なるいちボランティアじゃないですね。だからみんなで一回集まったり、ちょくちょく来たりっていうつながりができて。そういう場所が、日本にいくつかあってもいいんじゃないかなと思います。普段生活している場所以外に、人の手を、助けを必要としている場所があって、自分がそこに行ったら喜んでもらえるとか、お互い元気になるような。だから来る人も元気になるように仕向けていました。手伝う人にとってもプラスになるようにしなきゃなっていうところは、いつも考えています。利用してやろうみたいな感じだとやっぱり続かないし。だからボランティアに来た人の中では、南相馬の家族と仲良くなっちゃう、とかありました。励まし励まされてきている、そういう場所だと思いますよ。私はここがかわいそうだねって言われるような土地にしたくないので。ここに残った人も避難した人も、お互いが正解だったねって言えるようにしたいんですよ。10年経って、20年経ってね。まあじゃぶじゃぶ池とかは、大きなきっかけにはなりました。でも、それでおわりじゃなくって。今やっている活動も、少ない人数ですけども続けることによって元気が出て、よし、ここで家族として暮らしていこうという人たちが少しずつ増えてくれるのがいいかなと思っています。微力ながらですけど、そんな感じです。だから私も楽しくやっていますよ。大変ですね、とか、言われますけど、別にそんな大変じゃないですね。楽しんでやっています。走りながら休むタイプなので。ゆっくり休んじゃうと、もう腰あがらなくなっちゃうので。そのほうがいいんです。

◎福島県の近藤能之さんにお話を伺って

酒井真由子

近藤さんが目指していることはとても明確で、とてもシンプルでした。人間が生きるための本質的なものとはシンプルなのだな、と思いました。

近藤さんが目指すことはシンプルですが、近藤さんは多様なことを成しておられます。その一つに、色々な人たちが集まってくる「やどりぎ。」があります。近藤さんに、プレイパークとして登録している「やどりぎ。」内を案内してもらっている間、私は、「近藤さんって、なんて遊び心満載の方なのだろう！」と思っていました。近藤さんは、ポニーのララとこは

くに食べさせるニンジンを私たちに持ってきてくれたり、木々に設置されたやぐらに登り、「さあ、この鐘を鳴らす人？」と言ってきたり。馬と同じ小屋で人間が寝ることができるようにと、馬小屋の上部に人間が横になれる空間を作っていたり。

一方で、近藤さんにお話をお聞きしている間、私には想像もつかないような壮大な事業内容と近藤さんの力強さに圧倒させられました。

近藤さんに話をお聞きした数か月後、教育学者である佐伯胖氏の講義を聞く機会がありました。佐伯氏はジョン・デューイを援用しながら「あそび心とまじめ心の両方が保障されていて、あそび心とまじめ心が行ったり来たりすることが、心の持ちようとして理想」だといっていました。このとき私は、あそび心いっぱいであり、なおかつ、子どもや家族が安心を得るための事業を多様な方々と共に一つ一つ着実に進めておられる近藤さんの顔が思い浮かびました。震災後の南相馬市には、かなりの緊張があったと思いますが、まじめ心とあそび心の両方を備えておられる近藤さんだからこそ、じゃぶじゃぶ池、みんな共和国、こども食堂、ウクレレ、絵本ライブといった、多様なつながる場所や機会が生まれていったのだと改めて思いました。

近藤さんは「今の社会ってひとつのものの中に当てはめようとする、必ずこぼれてくるこどもとか家族とかが居る」からこそ、多様なフィールドやコミュニティを創るのだとおっしゃっていました。私にとって、胸にずしりと響く言葉でした。制度やメインストリームと呼ばれるようなところからこぼれ落ちていく人たちがいることすら、私たちは想像できなくなっています。けれど、近藤さんは、見えにくい方々にも思いを馳せ、こぼれてくる方々を受け止める場や機会を創るなど、実際に行動されておられるのです。そして、近藤さんご自身は保育園の副園長先生ですが、保育園以外の多様な場があるため、副園長職以外のポジションもいくつか持ち合わせておられるのだそうです。近藤さんが状況や場によって立場を変えることができるのは、きっと、近藤さんご自身があそび心とまじめ心を併存させているからなのだろうな、そして、近藤さんの周りにはいる方々も、あそび心とまじめ心の両方を持っているのだろう、と思いました。

近藤さんから学ぶことはとても多く、近藤さんのお話を周囲にも伝えていきたいし、私自身も子どもに関わる者として地域を見つめ直しながら、行動に移していきたいと思っています。

聞き手 京井麻由

まとめ 酒井真由子

編集 清水冬音